

本間玄調

水戸藩種痘の功労者 小美玉市・水戸市



(茨城県立歴史館蔵)

文化元年(1804) - 明治5年(1872)。茨城郡小川村〔小美玉市〕生まれ。本名は資章。号は棗軒。文政2年(1819)に本間益軒の養子となり、医業を志すことを決め、翌年17歳で江戸に出て、水戸藩医の原南陽に師事する。その後、蘭方医学や儒学を学ぶ。また、和歌山藩の華岡青洲の門をたたき、外科の技術を学んで習得するほか、長崎に出て、シーボルトからも医術を学ぶ。文政11年(1828)小川村に帰郷し、益軒の下で医療活動を始める。天保14年(1843)に水戸藩の侍医に登用され、弘道館の医学館教授を兼ねる。玄調の活動は、診療や教育の他に種痘法の普及や著述など多方面にわたっている。

本間玄調は、茨城郡小川村〔小美玉市〕で玄有の三男として生まれました。父の玄有も後に養父となった益軒も医者だったので、玄調は17歳の時、「自分も医者になりたい。」と決心しました。そこで養父の益軒は「玄調には新しい医学を学ばせたい。そのためには、ここにいてはだめだ。本当に医者になりたいならば、江戸にいる水戸藩医の原南陽先生に教えを受けなさい。」と言って、玄調を江戸に出しました。

玄調は江戸に出て、原南陽から教えを受ける中で、今までの医術に頼るのではなく、外国の医学もよいと思うものは進んで取り入れようとする柔軟な姿勢を学びました。(今までの医術では助けられなかった人々を救う方法が、外国の知識の中にあるのではないか。あるのならば、その方法を何とかして学びたい。人々の役に立つ医者になりたい。)

そして、当時新しい外国医学の知識を取り入れた蘭方医学を学ぶとともに儒学を学び、幅広い知識を得る努力をしました。この勉学の期間は7年にも及びましたが、玄調はまだ学ぶことはあると考え、和歌山藩の華岡青洲の門をたたきます。青洲は、今までの医学に外国の医学のよいところを加えた新しい治療法を考えました。特に青洲の外科の技術は、当時の治療水準をはるかに超えたもので、華岡流外科と称されました。玄調も青洲の医術に深く感銘し、天下一の名医であると知人への手紙に書いています。

さらに玄調は、天然痘という恐ろしい病気を防ぐ種痘の医術を身につけるため、長崎にも行きました。長崎では、ドイツ人のシーボルトという医師が、鳴滝塾という塾を開いていたので、そこで種痘術を学びました。

玄調は、青洲やシーボルトの他にも小川村に帰るまでの間にたくさんの医師を訪れ、様々な



『内科秘録』(茨城県立歴史館蔵)

知識や医術を学びました。

そして、郷里きょうりの小川村に帰ると、父のもとで、今まで学んだ医術を生かして、医者として人々の治療に当たりました。その活動が水戸藩に認められ、のちに藩の学校である弘道館こうどうかんの医学館きょうがく教授となり、医学教育も行いました。しかし、玄調の活動はそれだけではありませんでした。病気を治す方法を記した『瘍科秘録』、『続瘍科秘録』、『内科秘録』などの書物を著し、医学の発展はつてんに役立てるようにしました。当時は天然痘が流行し、多くの命が奪うばわれていたのです。玄調は天然痘予防のための種痘を行おうとしましたが、人々は、種痘の安全性を疑い、進んでこれを受けようとはしません。

(このままでは、天然痘に苦しみ続けるままだ。何とかして、苦しむ人々が出ないように種痘を広めたい。そのためには、種痘が安全であることを人々に知ってもらわなくては。)

そこで玄調は、藩主の徳川齊昭とくがわなりあき (P.43 参照さんしやう) とともに、人々に種痘が安全であることを知らせるため、自分の子どもや親族に接種せつしゆを行い、種痘の安全性を訴えました。このことから、二人の(何とかして種痘を広めたい。)という強い思いが伝わってきます。

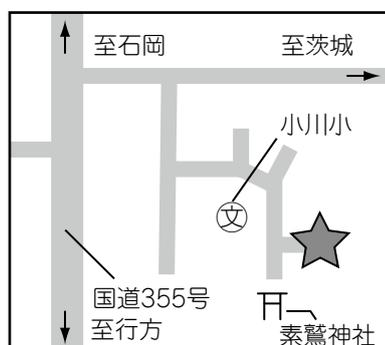
この強い思いから、天保14年(1843)に齊昭は、弘道館内に医学館を作り、館内で種痘を実施しました。水戸から遠いところには、医学館から医者が派遣はけんされました。こうして玄調は、水戸藩での種痘に関わり、医学の発展に大きく貢献こうけんしたのです。その後、明治18年(1885)、種痘法という法律ができ、天然痘の流行は影をひそめることになりました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

小美玉市小川図書館資料館

所在地 小美玉市小川1664-2

内容 この資料館には、本間玄調に関する資料が展示され、その業績ぎよくが紹介しょうかいされています。



おもな参考文献

『水戸市史中巻(三)』(水戸市・1976)

『水戸藩の医学』(大貫勢津子・筑波書林・1990)